



## 著者プロフィール

石 崙 岳（いしじま・がく）

昭和32年 東京生まれ  
成城大学大学院文学研究科修士課程修了  
昭和54年 「雪解」に入会。皆吉爽雨、井沢正江に師事  
昭和63年 『岳』（第1句集）上梓  
平成元年 「雪解」新人賞受賞  
平成14年 『虎月』（第2句集）上梓

現在、 「雪解」同人「塔の会」会員  
俳人協会幹事 日本文藝家協会会員

〈句集『嘉祥』より転載〉〈2006年9月21日時点〉

## 『嘉 祥』（自選十五句）

石 崙 岳

螢火やこれより先はひとりゆく  
白梅にはつはつこのゑありにけり  
寒明けの松のかたちの氣に入らぬ  
ひと雨に散つてしまひぬ水馬  
夕野分金魚明るき方へ寄り  
半跏より身を乗りだして時雨けり  
鼻の鬮嘗めてゐるやうなこゑ  
ほうほうと花の奈落をあるきけり  
死ぬるまで履かぬ靴あり春の暮  
眠るたび母に近づく櫻かな  
はんざきの笑うてゐたる水泡かな  
鶏頭のくれなる深き傷ならむ  
束ぬるは寂しからむと菊を焚く  
蟪蛄の風喰ふほどに枯れにけり  
枯蓮を見てきて坐る畳かな